

## 徳富蘇峰と川田順

——老いらくの「青春」——

徳富蘇峰と川田順——いうまでもなく明治・大正・昭和をたくましく生き抜いた大ジャーナリストと高名な歌人である。一見、結びつかない関係のように思われがちだが、川田順の「老いらくの恋」事件をめぐっての親密な浪漫的交友は、あまり知られていないようだ。ともに、類い稀な情熱家であった。

明治の史論家といえば、まず田口鼎軒、福澤諭吉、三宅雪嶺、山路愛山らとともに、徳富蘇峰の名が浮かぶ。「蘇峰は何と言っても明治文壇を光被する一個の偉大な文明評論家であり、社会評論家であり、且つ人物評論家であった」と白柳秀湖は「明治の史論家」でいう。明治の人物評論家鳥谷部春汀も『春汀全集』第二巻の「文士記者月旦」で、福地桜痴、福澤諭吉につぐ文壇の将星として、徳富蘇峰と朝比奈疎堂、陸羯南のジャーナリストを挙げている。蘇峰と川田順の親交を記す前に、蘇峰の横顔を素描して見よう。

文久三年一月熊本県に生まれ、作家徳富蘆花の実兄であることは、よく知られている。明治九年、十四歳のとき、新聞記者を志して上京、一高の前身だった英語学校に学んだが、新島襄を慕って京都の同志社に移り、明治十九年には『将来の日本』を刊行して、早くも頭角をあらわした。翌二十年、二十五歳で民友社を創立して「国民之友」を発刊、二十三年国会開設の年の二月「国民新聞」を創刊した。以来昭和四年退社するまで、社長・主筆として健筆をふるい、近代のジャ

ーナリズム界に盛名を馳せた。三百冊近い著作の中でもライフ・ワークは、三十五年の長きにわたって文字通り心血をそそいだ百四巻におよぶ『近世日本国民史』であろう。大正七年、五十六歳のときに筆を起し、昭和二十七年四月、九十歳で脱稿した。全巻二千六百万字、原稿紙にして実に二十三万枚という膨大な驚くべき偉業である。

三代にわたる大ジャーナリストとしての華やかさの陰で、彼ほど毀誉褒貶のはげしい人物もまた珍しかった。一方では思想家、史論家の高名をほしいままにしながら、他方では変節者とか時流にさとい俗物的才人との批評も多くなされた。しかし、世間の評判はどうであれ、彼が一世に近くを筆一本に託し「生きた近代史」の象徴的存在であったことは、いかならない事実であろう。

貴族院議員、帝国学士院会員、芸術院会員と華々しい活動を経て、昭和十八年には第一回文化勲章を受賞した。戦争中、言論報国会長、文学報国会長として、戦争協力の中心的立場にあったため、戦後は戦犯として一切の公職を追われた。彼は戦後、多摩墓地に石塔を建て「百敗院泡沫頑蘇居士」の戒名を自ら書いて、彫り刻んだ。文化勲章などすべての位階勲章を辞退し、ジャーナリスト本来の一介の「無冠の人」に戻ったのである。当時の心境を昭和二十八年十二月十四日の読売新聞に寄稿した「奉公のための生活——半生記」で、次のように記している。

濱 川 博

百敗院の院号は、老生自ら自己の一生を精算したる標号である。我を知るものは我に如くはなし、自ら百敗院の称号を甘しとする老生に取っては、その一生が失敗であり、徒勞であったことは、今更断るまでもない。然も又老生に取っては、我が一生は不幸でもなく、不満でもなく、不平でもなく、不足でもなかった。正直のところ、長き一生を幸福と感謝の連続にて送ることを得たは、自分ながら何等の幸運であるかを、自ら驚く程である。

敗戦というきびしい歴史的現実のなかで、おおかたの日本人が茫然自失としていたとき、国の命運とともに生きてきたおのれの歩みを失敗であり、徒勞であったと回想しながらも「何等の幸運」と言い放つところに、したたかともいえる蘇峰の背骨がうかがえる。私はこの一文にふれたとき「私は馬鹿だから反省などしない」と戦後間もなく逆説的に開らぎなおった小林秀雄のふてぶてしいまでの図太さを想起した。ともに「反骨の人」といえないだろうか。「百敗院」の号は、自戒とも自嘲とも受けとれるような表現だが、「泡沫頑蘇居士」はどう解釈したらよいのだろう。蘇峰はこの戒名と同時に「待五百年之後」の筆蹟も遺している。五百年のちに歴史がどのような評価を下すかを静かに待っているという意味だろうか。神奈川県二宮町の徳富蘇峰記念館でこの筆蹟を見たとき、一代の悲劇的ジャーナリストであり、史論家であった蘇峰の遠大な骨格のたくましさをかいま見る思いがした。

すべての公職から追放されて野の人に帰った彼は、熱海市伊豆山の晩晴艸堂に隠棲し『近世日本国民史』を早朝から書きつづけた。脱稿のあとは、引きつづき中国四千年史の執筆を準備していたという。だが、それには手を染める間もなく、昭和三十三年十一月二日ついに大往生した。九十四歳の起伏に富んだ多彩な生涯であった。絶筆の書は、死の九日前、色紙にしたためた「一片丹心渾忘吾 蘇叟九十五」

の七文字であった。一片の丹心は、まさに人間蘇峰の真骨頂であったといえるだろう。

天翔けり終に歴史となりたまふ 噫我々乃蘇峰先生

ドラマチックともいえる蘇峰の死を悼んだ川田順の歌である。川田と蘇峰の出会いには、いつごろからか、はっきりしない。川田の未亡人で歌人の俊子さんは、昭和七、八年ごろではないかという。そのころ、蘇峰の長女孝子さんは、佐佐木信綱門で短歌を学んでいた。同門で歌誌「心の花」を編集していた山下陸奥が独立して歌会「一路」を結成し、その大会が開かれたとき、蘇峰と順は初めて知りあったらしい。川田の父剛は甕江（おうこう）と号し、宮中顧問官で、わが国に学位令が敷かれたとき、最初の文学博士になった人である。蘇峰はかねて甕江を敬愛していたようで、二人は初対面から親しみの情を覚えたようだといふ俊子未亡人はいふ。

二人の手紙の往来が繁くなったのは、川田順の有名な「老いらくの恋」事件以後であった。この事件は、昭和二十三年の暮れ、当時皇太子の歌の指導をしていた川田と、歌の弟子で京都大学教授中川與之助博士夫人だった俊子さんとの、激しい恋愛事件がジャーナリズムをにぎわし、世間の耳目をひいたものである。皇太子の短歌指導も教授夫人という社会的名声も、ともに一切をかなぐり捨てて、神奈川県国府津に隠遁し、老いらくの愛の日を送った二人の燃えつくすような恋の一途さは、いささか敗戦ボケしていた世相に衝動的な波紋を投げた。

若き日の恋は、はにかみて

おもて赤らめ、壯子時（おさかり）の

四十歳（よそじ）の恋は、世の中に

かれこれ心配（くば）れども



墓場に近く老いらくの

恋は、怖るる何ものもなし

川田が当時詠んだ「恋の重荷」と題する長詩の一節は、象徴的である。川田はすでに六十八歳であり、三十歳も年下の俊子さんは一男二女の母親であった。明治十五年東京三味線堀に生まれた川田は、一高から東大へ進み、十六歳で佐佐木信綱の竹柏園に入門した。木下利玄や新井洗より三年も早い短歌へのスタートであった。東大文科では、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の最後の講義を受けたが、八雲が東大を去ると、ハーンなき文科に魅力はないと法科へ転じた。大学時代は小山内薫や武林無想庵らと同人誌「七人」を出した。明治四十年東大卒と同時に住友本社に入社、昭和五年常務理事となり、十一年に辞職して実業界を退いた。俳人山口誓子や作家源氏鶏太は、住友で川田にかわいがられた部下だった。昭和十七年には歌集『鷺』などで高村光太郎や小磯良平らとともに第一回芸術院賞を受け、十九年朝日新聞社賞を受賞、歌人としてまた西行の研究家として声名は高かった。ちなみに、川田の姉綾子が尾崎紅葉の有名な小説『金色夜叉』のモデル「お宮」であることは、知る人ぞ知るだろう。明治三十年巖谷小波から求婚された綾子は、これをことわった。小波の悲歎を耳にした師の紅葉が綾子をモデルに創作したのが『金色夜叉』であった。

妻に先立たれてすでに十年、孤独の身をこめていた川田の前に俊子さんがあらわれたのは、昭和十八年戦争たけなわのころである。歌を学びたい一心の俊子さんが、川田の弟子として入門したのは、翌十九年のこと。弟子を一人も持たないことを信条としていた川田も、自分を慕ってくる若い人妻へいつしか心ひかれてゆき、俊子さんもまた師への敬愛の情があこがれにも似た愛の炎に変わって行ったのである。二人が会うたびにその炎は、おさえきれぬ激情へと高まって行った。

かしの実の独りものにて終らむと思へるときに君現はれぬ

死なむと念ひ生きむと願ふ苦しみの百日つづきて夏去りにけり

川田がこんな歌を詠めば、師の激情に呼応するかのよう、俊子さんもまた老歌人へのひたむきな愛の告白を歌った。

命こめて作らむものと歌に寄せしこの吾が心君によりゆく

はしたなき世の人言をくやしともかなしとも思へしかも悔いなき

恋は盲目という。恋は一種の狂気といえるかも知れない。「恋ひ死なば恋も死ねとや」と遠い万葉びとも歌った。「黒髪は乱れもしらず打臥せば先づ掻きやりし人ぞ恋しき」恋愛歌の白眉ともいわれる和泉式部の歌は、官能のきわみを歌って哀切である。ゲーテも「恋愛について」歌う。

うれしや

切なさや

むすぼる思ひ

こがれつつ

もだえつつ

うづく痛みや

歓（よろこび）に天馳すさけび

悲しみに 死をこそ望め

幸（さき）ぞただ

愛する心

恋いこがれる恋のもだえは、古今東西を通じて数限りなくうたわれ

てきた。情艶の妖しい炎は、宿命的ともまた普遍的ともいえる。背徳とも不倫ともそれがちな人妻への狂おしい恋にもだえる川田は、自殺未遂事件まで引き起している。当時川田が俊子さんにあてたおびたらしい手紙は、藤沢市辻堂に住む俊子さんが大切に保存している。作家の吉屋信子は「老いらくの恋」事件を小説化しようと、俊子さんを訪ね、手紙を見せて欲しいと要望したが、俊子さんは一通も見せようとしなかったそうだ。作家の筆先でフィクションとして扱われるのを警戒されたのであろう。私はその手紙を何通か見せていただいた。以下は昭和二十二年七月二十五日川田が俊子さんにあてた手紙の全文である。

いとしい俊子、私は今朝未明から起きて、又も考へ耽つてゐる。俊子が家のなかで責めさいなまれ、私の生命よりも大切と思ふ俊子のからだに生疵の出来るのを、もはや拱手傍観しては、相すまないといふ心持になった。愛する者を苦しめ続けて「我慢してゐて下さいよ」と頼むだけでは、私は余りにも主我的な人間ではなからうか。愛するが故に、私一人が最大の犠牲を拂ふべき時が到来したと信ずる。

主人が安心して俊子を妻とし、眞生子さん達が安心して俊子を母とし、さうして俊子も責めさいなまれることなく中川俊子として生きて行く為には、私がゐなくなるといふ以外の途は、最早無くなつてしまつた。さうでない限り、俊子は生涯苦しめられねばならぬ。愛する者を苦しめ続けて今生を終らせるといふことは、いかにそれが宿命とはいへ、俊子を愛する川田としては、余りにも主我的である。私は最大の犠牲を甘んじて拂ひ、俊子を苦患から救はねばならぬ。

私は神佛に祈つて、天命を縮めて頂かねばならぬ。心配して下さるなよ、血を流したり、毒を仰ぐのではない。おのづからにして天寿を縮めて頂くのである。出来るだけ早く天命に到来しても

らふのである。俊子は、十年、二十年、何十年とながらへて、中川の家のよき主婦として、静かに此の世を去つて下さい。たゞく希ふことは、最後の瞬間まで川田を忘れずにゐて、眞実の愛の人として心に守つてゐて下さいよ。来世では必ず添つて下さいよ。それ以上に、川田の満足する幸福はあり得ない。本当に、今生では眞実そのものであつた我が俊子よ、私は俊子の未来の眞実も決して疑はない。

最愛の俊子よ、俊子は何とか工夫して、鍛錬して、川田のゐなくなつた後も絶望せず、病氣せず、出来るだけ、からだを大切に、出来るだけ、永らへて、主人と子達の為に盡してあげねばならぬ。万一にも、それでないと川田が最大の犠牲を拂つた目的がだめになつてしまふ。川田は犬死したことになる。どうぞ俊子、川田を安心させて、静かに天命を縮めさせて下さい。

大切なものを唯一つ、俊子に托しておいて、心残りなく天命の到来を待ち度い。それは川田の最後の芸術で、俊子に與へた約二百首の短歌を、推敲整理した原稿である。これを川田と思つて、十年、二十年、何十年俊子の側を離さず、大切に保存して下さい。既に原稿の整理は出来た。これは俊子への最後のおくりものとして俊子に手渡しせねばならぬ。万一にも將來これを上梓し、公刊しても、俊子にも中川家にも差支の起らないといふ如き場合が来たと仮定したならば、その時は出版を何人に依頼し、どういふ風にすべきかは、俊子に私の口から話しておく。俊子よ、気分が快くなつて、外出の出来るやうになつたら、早く来て下さいよ。筆舌に尽されぬ切ない思ひがある。一時間でも三十分でも鉄鎖を引きちぎつても来て下さいよ。

私の天命の到来する迄は、俊子の都合づく限り、幾度でも逢はうよ。私は天命の到来を祈り、俊子の側からゐなくなり度いと決意したのは（必ず誤解してはいけない）私の眞実が退散したのではない、否々更に前進したのである。今生で添ひ遂げられるも



のならば、なんで私が大切な天命を、俊子の為にも大切な私の天命を、縮めて下さいと神様にお願ひするものか。とても添ひ遂げられさうにもないものを、徒らに俊子を苦しめ、大切な／＼そのからだに不断の生疵を負はせるのを、傍観してゐるに堪へられなくなつた故である。いとしい俊子、ゆめ／＼誤解して下さるな。

#### 七月廿五日の朝

二人の恋が燃えさかれば、燃えさかるほど中川教授と俊子夫人との争いはたえず、夫人はいつも生疵を負っていたという。川田が「鉄鎖を引きちぎつても来て下さいよ」と訴えているのは、そんな事情による。当時川田はこんな長文の手紙を、時には一日に二回も書いて、こっそり俊子さんの子達にあずけていた。とても六十八歳の老歌人とは思われぬ、みずみずしい情感があふれている。

「老いらくの恋」が世間に大々的に公表されたのは、昭和二十三年十二月四日の朝日新聞が「老いらくの恋は怖れず、相手は元教授夫人、歌にも悩み川田順氏一度は死の家出」と四段抜きで報道してからだった。世評はこの突然の事件に驚ろき、反響も賛否両論にわかれた。短歌に結ばれた師弟の愛の芽生えに何のためらうことがあるかという激励の声と、一方では、川田は墓場に近ければ何をしてもよいと考えているのか、何たる暴言、何たる非道德的罪業と非難する声が入り乱れた。川田の友人谷崎潤一郎からは「勇氣あれ」の激励電報が寄せられ、武者小路実篤からは「いろいろな他人にはわからない点も多いと思いますが、今後大いに日本の文学のために働いていただきたい、君でないと出来ない仕事も多いと思います」と友情あふれる手紙がきた。

こんなとき、川田の苦悶と傷心を熱海から慰め、はげましたのが蘇峰であった。蘇峰は神奈川県二宮町にいた塩崎彦市を通して、激励の歌二首をおくった。塩崎は早くから蘇峰に心服し、戦後追放された蘇

峰の生活の面倒を何くれとなく見ていた秘書のような存在だった。二宮町の広い自宅の一角に私設の蘇峰記念館を建設したほどの篤志家である。

恋するなら生命をかける 中途半バ俺は否(いや)

好た二人は手鍋をさげて 出来た愛の巢雲の峰

この二枚の色紙には「作者不知」と書かれ、「百敗院」の印がおしである。「作者不知」とは、歌詠みでない蘇峰のシャレだろうか。ともあれ、蘇峰の力強い声援が、傷心の極にあった川田をどれだけ勇気づけたことか。背徳とまでいわれた「老いらくの恋」をとにかくもかちとり、川田が俊子さんと京都をひき払って、神奈川県国府津へ引き越してきたのは、昭和二十四年三月。それより一カ月ほど前蘇峰へあてた手紙には、こう記されている。

肅啓 漸く春めき小庭にも毎朝鶯声を聴き申候 先生には御清健の御事と昨日当地牧野虎治氏より伝聞仕以て御よろこび申上候 実は先頃牧野氏より書面(同氏東京行の列車中にてしたためし)を受取申候 それによれば、徳富先生に御めにかゝりしところ川田はいづ頃東京へ居を移すのか東上の際には鈴鹿(俊子さんの実家名)筆者注)と一緒に熱海に立寄つてもらひ度し親しく話したき事あり 云々

それで乍延引昨日牧野氏を訪問いたし先生の御近状を拝聞したことに候 国府津に適当な借家を発見いたし候 名取和作翁邸内の一軒に候 名取翁と小生といささか知りあひの間柄とて翁は小生の窮状に同情し喜んで貸してやるとの事にて実にわたりに船の仕合せいたし候事に候 三月中旬には引移り度と存候 国府津に一旦おちつき候上にて直に拝趨可仕候間しばらくの御猶予を奉希

上候 自分にては新生活を創める心の緊張を持し居候へども前途極めて多難荊棘の道なることもひそかに覚悟いたし居候 幸に先生の御厳訓に接し前途の踏み方を甚しくあやまらぬやうにと勝手のこと考へ居候 実に久々にて拝眉の機迫れるは至愚の小生としておそろしくもあり又うれしくもあるやう複雑な感に不堪候 草々

蘇峰は公職追放者として、戦後のジャーナリズムからは不評であったが、川田もまた戦争協力の歌を作ったとして、斎藤茂吉らとともに一部から戦犯者として指弾されていた。当時を回想した川田の「私の履歴書」（日本経済新聞）には、こう記されている。

太平洋戦争は敗北で終わった。斎藤茂吉や川田順などは戦犯だとはざいた歌人があった。ずうずうしいもので、おのれも愛国歌を作りながら「自分が愛国歌を作ったのは軍部に強要されたからだ」とケチくさい弁解をした人間もたくさんいた。これだから日本人は敗北したのだ。

ついきのうまでは、盛んに時流に迎合していたおおかたの知識人が敗戦の一夜がなければ、百八十度の転向を見せた変節ぶりは、世界のどの国にも見られないような、骨積ないやらしい風景であったことは、詩人の金子光晴も指摘している。マッカーサーはそんな日本人の姿を「勝者にへつらう性格」と米議会で証言したことは、有名である。川田はそれを「ケチくさい弁解」と反論したのだった。川田は「老いらくの恋」事件で騒がれたあと、蘇峰との再会を「私の履歴書」に書いている。

この閑居を最初におとずれたのは、徳富蘇峰先生の秘書、億万長者の塩崎彦市氏である。蘇峰先生はボクに同情して、慰めの手

紙を下さった。先生はジャーナリズムの評判がわるいから交際すると損するぞ、とボクに忠告した人があった。とんでもない娯婆くさい忠告だ。人間は損をしても交際せねばならぬ場合がある。ボクら明治の青年は、先生から多少とも学恩をいただいているのである。先生最期の病床で「俊子さんは来ていないか」と言われたそうである。先生逝去の新聞記事を見て俊子は駆け付けた。おそかった。まことに相すまない。

どこまでも人間の節操を第一義とする明治人の心意気がここにあら。ジャーナリズムの波に乗る、乗らないは、人間の第一義の道とは何らかかわりのないことであった。

二人の文通が盛んになった昭和二十四年、こんどは「徳富蘇峰のラブレター」というセンセーショナルな記事がマスコミをにぎわした。その年の九月「野ばら社」から出版された志村文蔵編『徳富蘇峰翁と病床の婦人秘書』が話題を呼んだのである。

この本は、蘇峰の秘書だった八重樫東香という女性が巣鴨癌研康楽病院に入院していた昭和十八年七月から十一月までの四カ月間、蘇峰は毎日欠かさず見舞の手紙を送り、その数は百三十通に上ったのを一冊にまとめたものだった。癌を病んで死期の迫った女性秘書に毎日慰めの手紙を出したという真似は、だれでもできることではあるまい。しかも、戦争が最も熾烈をきわめたころである。日によっては二通の手紙それも二百字原稿紙十六枚という愛の告白をせせと書き送った川田といい、そしてこの蘇峰といい、現代人には到底考えられないような明治人の気骨の太さを感じられないか。

八重樫は明治三十七年岩手県花巻の生まれ。青山学院英文科を出たあと主婦之友社の編集者となり、昭和の初め民友社に移って蘇峰の秘書になった。そのとき蘇峰は六十四歳、彼女はまだういいうい二十三歳であった。蘇峰は本の冒頭に追悼の詩を献上している。



君は百合を愛したり 君は 百合の如く清純に生き 百合の如く清薫を残し 而して 百合のごとく 清浄にして逝けり  
そして八重樫との関係について、こうしるす。

予に対する女史の態度は、尊敬と言ふ言葉でも、説明は出来ず。親愛と言ふ言葉でも、説明は出来ず。尚更ら恋愛などと言ふ文句は適当でなく、只だ一種何とも言へぬ思慕の念を持ってゐたのでは、あるまいかと思ふ。

マスコミが「ラブレター」と題したのは、興味本位以外の何ものでもあるまい。彼女の死期が迫っていることを医師から知らされた蘇峰は、毎日、弔文を読む気持で書いたと自ら記している。その手紙の一節は――

昨夜カラ雨、晩晴艸堂ノ百合ガ咲キ溢レ候。我庵ノ山百合ノ花咲キニケリ トモニ賞ント思フ人ヲ思フ。セメテ折り病床ニオクリタシ。

昨夜老生ハ御身ノコトヲ思ヒツバケテ、病苦ヲ辛抱シタ。御身モ亦希クハ老生ノコトヲ思ヒツバケテ御辛抱アリタシ。両身一心。希クハ互ニ憂苦ヲ偕ニシ、歓楽ヲ同フセン耳。

この本を読んで「世界史上稀なる人生愛史」と雑誌「婦人世界」で絶賛したのは、ほかならぬ川田順であった。川田は昭和二十四年十一月十一日「都新聞」の「私の選んだ良書」という欄で「蘇峰翁八十四歳の時死の病床に臥ている四十歳の女秘書に与えた手紙百三十通を公開したもので、人間の至情のいかなるものかを教えらるる尊きドキュメントである」と書いた。そして、その月の十五日蘇峰へこんな手

紙を送っている。

拝啓立冬後漸くお寒くなりましたが御健勝の御事と存上ます  
先頃は小生共二人へ尊翰賜はり忝く存上ます 野ばら社刊行の書籍に対し愚見をしたゝめ塩崎氏を経て御覧に入れましたところ  
どうやら及第したやうで 望外の喜びに存じます もしも弔花老が健康で居りましたならば もつと上手にもつと突込んだ註解を  
ものしたらうと残念に存じます

「老いらくの恋」事件で死まで覚悟した川田にとって、蘇峰の胸中はいやというほど察せられたにちがいない。ゲートが生涯恋に生きたように、蘇峰も順もまた『老いらくの愛』をみごとに生き抜いた永遠の青春の人であった。二人のひたむきな愛の遍歴は、日本の近代恋愛史を彩るひとこまとして、長く語りつがれるだろう。